

■いわて自然ノート

「岩手公報」の記事に見る 1896 年陸羽地震

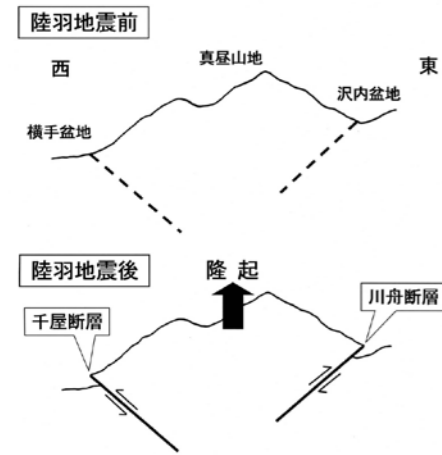
学芸第二課長 吉田 裕 生

はじめに

歴史時代の地震の研究には、地質学や地形学・地球物理学的調査に加えて、古文書の調査が欠かせません。文書の記録から被害の程度や範囲がわかり、地震のマグニチュードを推定するデータなどが得られます。明治期に入ると新聞が創刊され、その報道記事から地震の性質や被害の状況、また地震が社会に与えた影響など、多くの情報が得られるようになります。1896年に岩手・秋田の両県を襲った陸羽地震について、博物館にある当時の本県の日刊紙「岩手公報」(現在の岩手日報の前身)の記事から、この地震がどう報道されていたのかを探ってみました。

陸羽地震の概要

陸羽地震は1896(明治29)年8月31日午後5時6分に、当時の岩手県西和賀郡と秋田県仙北郡境の奥羽山脈(真昼山地)を震源として発生したマグニチュード7.2の直下型大地震です。震源地付近の震度は6ないし7に達し、秋田県横手盆地と岩手県沢内盆地を中心に両県で209人が亡くなり、5000戸以上の家屋が全壊しました。この地震は奥羽山脈のへりを走る東西二列の活断層(川舟

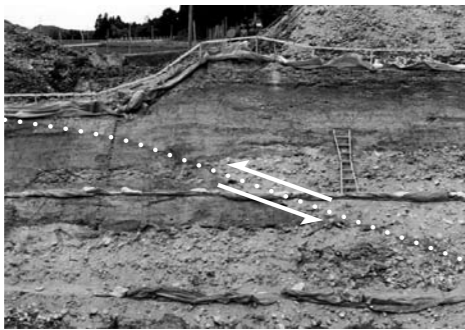


陸羽地震を発生させた川舟断層と千屋断層の運動

断層と千屋断層)が同時に活動したために起こったもので、両断層の運動によって真昼山地全体が数m隆起しました。わずか2ヶ月ばかり前の6月15日には、2万人以上の犠牲者を出した三陸地震津波(明治三陸津波)が来襲しており、この年の岩手県は二度にわたって大きな災害を被ることとなりました。

前兆現象の報道

陸羽地震の震源地付近では、8月23日頃から群発地震などのさまざまな前兆現象が認められていました。23日午後起こった地震は東北一円で揺れが感じられるほど大きなもので、土蔵の壁や道路に亀裂が入るなどの被害が出ました。岩手公報はこの地震を25日に『怪しからぬ地震』の見出しで報道しています。記事末尾の『一種底気味悪き震動なれば復たも海嘯(津波のこと)とか…』は、人々の漠然とした不安感を代弁しています。地震の記事は26日と28日にも掲載され、28日の記事には、『山鳴動の噂』の見出しで、鶯宿温泉に近い男助山のあたりが鳴動すると報じています。



発掘調査で現れた川舟断層(点を打った部分) 西和賀町沢内川舟字ハツ又

1989(平成元年)年に電力中央研究所が発掘調査(トレンチ調査)を行った。逆断層による変位で奥羽山脈側(画面右方)が隆起しているのがわかる。

●怪しからぬ地震 一昨日午後三時四十五分頃、俄然地軸を撼かし来る震動と皆人の知る處あるが實に二十年來に之れ無き地震にして外に畑働きのものさへ地響に足打たれしありと全日午後八時過にも大砲の如き音地に響きて聞へ又昨日午前九時にも前全様乃大地震ありたり通常の震動と違ひ一種底気味悪き震動なれば復たも海嘯とか或は山崩れとかの變事なやと人々危懼し居れり

「岩手公報」 明治 29 年 8 月 25 日号

●山鳴動の噂 彼の地震以來兎角に人心落ち付かぬ中には探るにも足らぬことを牽強付會まで云ひ嘘ものも又強ちに牽強付會とも云ふべからざるものあり已に昨紙掲載の鶯宿温泉の湧口止まりたりと云ふ矢先きに全處の山嶺さある南嶽山御所村宇南畑の男助山、女助山と稱する相應の高山ありて男助山の方地震以來時々鳴動し始めたものと噂さ取りあり尤も該山と今度に限らず雨模様の際には屢々鳴動したるおとありと云へば強ち今度に限りたる次第にあらねど折しもの影日來の地震ある爲め一層口の端に登ることなるべし

「岩手公報」 8 月 29 日号

ところがこれらの報道に対して地元の御所村役場は、このような事実は一切なく風評被害を受けたとして、8月30日に岩手公報に記事の取消を要求しています。公報側もこれを認め、取消要求書の全文を掲載することにしましたが、31日は休刊日のため、掲載は本震翌日の9月1日になるという何とも皮肉な結末となってしまいました。

●取消申込 左の如く申込ありたるよ付控に貴社公報一千九百廿二號を以て本月廿三日地震の爲め當部下御所村大字鶯宿温泉湧出停滯し爲めに浴客を引揚たる云々及千九百廿三號を以て該温泉湧出停滯し男助山及女助山鳴動し人心穩かならざる云々掲載あるを以て取調候處當村内は右様の事實一切無之且つ同地營業者に於て支障の康有之旨申出有之候得ば全文を掲げ速に御取消相成度候也 明治廿九年八月三十日 南嶽山御所村役場 巖手公報社御中

「岩手公報」に9月1日になってから掲載された御所村役場名の記事取消申込

震災被害の報道と温泉場の広告

群発地震はいったん沈静化し、29日と30日には有感地震はほとんどなくなりました。しかし、31日になって地震活動はにわか活発化し、午前中の数回の上下動を伴う大きな地震に続いて、午後4時半過ぎにはこれまでの前震活動の中で最大の地震が起こり、ついに5時6分にそれをはるかに上回る本震が発生しました。岩手公報では同日夜に号外を発行し、電報によって伝えられた県内各地の被災状況の第一報を報道しています。この中には、『市民狼狽して病院寺等に逃避今尚ほ雑踏中』や『陰雨にも拘わらず街路に板敷きて露宿する者多し』などの記述が見られます。

翌9月1日の紙面は、地震については『昨日の劇震』の見出しのついた、わずか十数行の小さな扱いにとどまっています。本格的な報道は2日から始まり、31日の号外記事を再掲するとともに、盛岡周辺の震災の状況が報道されています。しかし、第一面の末尾には『お断り』として、『今回の劇震にて諸般混雑の為に本日は余儀なくも二ページだけの本紙

温泉の無事と来浴を呼びかける広告 「岩手公報」9月9日号

を発行せることとなれり』とあり、地震による混乱で取材や発行がままならなかった状況がうかがえます。

震災報道は、日を追うごとに詳細に、かつ広域的になってきます。9月8日には『秋田仙北震災別報』の見出しで、仙北郡内の町村別に、死傷者数や全半壊家屋数が具体的に記述されています。この記事には『千屋村最も激しく四町歩の地面二丈余高まり又一丈五尺余陥落せるもあり』の記述があり、これは千屋断層の活動によって形成された断層崖などの地形を指している可能性があります。

ところで地震直後の9月5日頃から、被災地周辺の温泉場(網張・台・志戸平・鉛)の『温泉は無事であり来浴を願う』との広告が毎日のように掲載されるようになります。地震の前後に鶯宿・湯本・湯川の各温泉で、温泉の湧出が止まったと報道されたことによる風評被害を懸命に打ち消そうとしている様子がよくわかります。

山崎直方の現地調査の報道

陸羽地震の発生を受けて、震災予防調査会は、山崎直方(地形・地質学者、のちの東京大学教授)を現地に派遣しました。山崎は川舟断層と千屋断層を発見し、

この両断層の活動が陸羽地震の原因と考え、報告をまとめました。岩手公報では、この調査の経過を詳しく報道しています。それらの記事には興味深い内容のものが含まれていますが、紙数の関係もあり、別な機会に紹介したいと思います。

おわりに

草創期の新聞には、記事内容に正確さを欠いているという先入観がありました。確かに、『殊に見事なりしは便所の糞水震動の為に一時に跳梁紛飛して四方の白壁に一面に附着し高さ一間半にも上れりと』のような誇張?された伝聞記事も見られます。しかし、このような記事を除くと、岩手公報は陸羽地震の経過や震災の状況、山崎の調査結果などをおおむね正確に伝えていきます。また、風評による湯治客の減少という、現代と同じ社会問題が発生したこともわかりました。

昨年本県は、陸羽地震と同じ直下型地震である岩手・宮城内陸地震に見舞われ、大きな災害を被りました。減災や防災のためには、最新の科学と技術に基づく研究のほかに、先人が残した記録をひもとくことも重要です。この「だより」が発行される9月1日は、関東大震災を教訓に制定された「防災の日」です。